第三章　浮舟の物語　中将、浮舟に和歌を贈る

［第一段　尼君の亡き娘の婿君、山荘を訪問］

尼君の昔の婿の君（妹尼君の昔の娘婿の貴公子は）、今は中将にてものしたまひける（今は中将になっていらして）、弟の*禅師の君（その弟の修行僧の貴公子は）、僧都の御もとにものしたまひける（僧都の弟子になっていらして）、山籠もりしたるを訪らひに（山籠もりの修行中を見舞うのに）、兄弟の君たち（はらからのきみたち、兄弟の貴公子たちが）常に登りけり（よく比叡山に登っていました）。　＊「禅師（ぜんじ）」は特に禅僧を言うこともあるようだが、一般に僧侶の尊称らしい。尤も、私はそも＜禅＞が何かも知らないし、今は興味も無い。

横川に通ふ道のたよりに寄せて（横川に通うついでに立ち寄って）、中将ここにおはしたり（中将が小野尼庵にお見えになりました）。前駆うち追ひて（さきうちおひて、先導が人払いの声を上げて）、あてやかなる男の入り来るを見出だして（派手な装束の男が邸内に入って来るのを部屋の中から見出して）、*忍びやかにおはせし人の御さまけはひぞ（忍んで会いにいらっしゃっていた宮様のお姿が）、さやかに思ひ出でらるる（常陸姫にははっきりと思い出されます）。　＊「忍びやかにおはせし人の御さまけはひ」は注に＜『集成』は「人目を忍ぶようにして（宇治に）通っていらした方（薫）のご様子、振舞いが、ありありと思い出される」と注す。＞とある。大将と中将なら同じ近衛武官だから雰囲気が似ている、ということだろうか。しかし、常陸姫は薫大将には義理を感じるが、恋心は匂宮に対してあるのであり、だから悩んで入水を思い立ったのだから、薫殿を思い出すことはあるだろうが、「さやかに」認識するとなると、やはり＜匂宮＞だと私には思える。

これもいと心細き住まひのつれづれなれど（この尼庵もとても質素な住まいの暮らしぶりだが）、住みつきたる人びとは（住み慣れた老尼たちは）、ものきよげにをかしうしなして（丁寧に庭を手入れしていて）、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく（垣根沿いに植えてある撫子も美しく）、女郎花、桔梗など咲き始めたるに（女郎花や桔梗が咲き始めた秋の風情に）、色々の狩衣姿の男どもの若きあまたして（色とりどりの狩衣姿の男たちの若者が多く居て）、君も同じ装束にて（中将君も同じ狩衣装束で）、*南面に呼び据ゑたれば（南表に迎えて席を設けたので）、うち眺めてゐたり（庭を眺めて座していました）。*年二十七、八のほどにて、ねびととのひ、*心地なからぬさま*もてつけたり（年齢は27、8歳で、立派に成人し、相応の分別ある落ち着いた態度をしていました）。　＊「みなみおもて」は注に＜寝殿の南廂。正客を迎える作法。＞とある。　＊「としにじふしちはちのほど」は注に＜『完訳』は「薫や匂宮とほぼ同年齢」と注す。＞とある。因みに、薫殿28歳、匂宮29歳、常陸姫22歳、あたり。早目の年齢明示は助かる。　＊「ここちなからぬさま」は分かり難い。「ここちなし」は＜思慮がない。分別がない。心ない。＞というク活用の打消意の形容詞と大辞林にある。「ここちなからぬ」は、その未然形「ここちなから」に打消しの助動詞「ぬ」が付いた二重打消語だ。「さま」は態度か。　＊「もてつけたり」も分かり難い。「持て付く」は＜取り繕う＞と＜身につける、身に持ち備える＞の語用があって、此処では後者らしい。

尼君、*障子口に几帳立てて、対面したまふ(尼君は襖戸口に几帳を立てて中将と対談なさいます)。　＊「さうじぐちにきちゃうたてて」は注に＜母屋と南廂の間の襖障子を開けて、中将との間に几帳を立てて会う。＞とある。尼庵では、却って御簾などは下げないのだろうか。

まづうち泣きて(尼君は少し泣いて)、

「*年ごろの積もるには(姫君が亡くなって何年にもなりますと)、過ぎにし方いとど気遠くのみなむはべるを(昔が遠く思われますが)、山里の光になほ待ちきこえさすることの(あなた様の御訪問を光栄に存じて、お待ち申す気持ちが)、うち忘れず止みはべらぬを(忘れられず続いておりますのが)、*かつはあやしく思ひたまふる(却って山里暮らしの甲斐が無いようにも思われます)」　＊「としごろ」は注に＜妹尼の娘が亡くなって五、六年を経過。＞とある。年数は今までには語られていないことなので、後で示されるのだろう。　＊「かつはあやし」は軽口口調の愛想の常套句みたいなものなのだろう。

とのたまへば(とおっしゃると)、

「心のうちあはれに、過ぎにし方のことども、思ひたまへられぬ折なきを(内心では昔のことを懐かしく思い出さない時はありませんが)、あながちに住み離れ顔なる御ありさまに(せっかく俗世を離れるお心算でお暮らしの此方には)、おこたりつつなむ(ご遠慮申して、無沙汰しております)。

*山籠もりもうらやましう(弟の山修行も羨ましく)、常に出で立ちはべるを(横川へはよく立ち寄っておりますが)、同じくはなど(同行したいと)、慕ひまとはさるる人びとに(付いて来る者が多く)、妨げらるるやうにはべりてなむ(此方へ参じるのを、邪魔される格好になっていまして)。今日は、皆はぶき捨ててものしたまへる(今日は、それらの者は皆、省いて参っております)」　＊「やまごもりもうらやましう」は注に＜弟の禅師の君の出家生活。『完訳』は「亡妻の冥福を祈る気持のあることをも暗に言う」と注す。＞とある。

とのたまふ(と中将は仰います)。

「山籠もりの御うらやみは(山修行の御羨望は)、なかなか今様だちたる御ものまねびになむ(姫の追善というよりは、今流行りの多忙逃避なんでしょう)。昔を思し忘れぬ御心ばへも(ですが、故人をお忘れ無いお気持ちも)、*世に靡かせたまはざりけると(時に流されて疎かになってはいらっしゃらないものと)、おろかならず思ひたまへらるる折多く(有難く存じられます)」　＊「よになびく」は＜世に染まる→再婚の誘いに応じる＞だと分り易いが、中将の事情は分からないので曖昧に言って置く。

など言ふ(と尼君は言います)。

［第二段　浮舟の思い］

人びとに*水飯などやうの物食はせ(尼君が供人たちに湯漬けなどの物を食べさせて)、君にも*蓮の実などやうのもの出だしたれば(中将にも蓮の実などを出すと)、馴れにしあたりにて(親しくした義母の家なので)、*さやうのこともつつみなき心地して(中将もそうした接待に遠慮することなく)、村雨の降り出づるに止められて(村雨が降り出したことに足止めされて)、物語しめやかにしたまふ(しんみりと話し込みなさいます)。　＊「水飯」は「すいはん」と読みがあるが＜炊飯＞のことではないらしい。「水飯」は湯漬けか水漬けの穀類らしい。　＊「はちすのみ」は＜ハスの種子。未熟なものは甘いので生食し、完熟したものは乾燥して菓子や料理の材料に用いる。《季 秋》＞と大辞泉にある。注には＜『集成』は「間食ないし酒の肴とする。いわゆる「くだもの」と総称される中に入る」と注す。＞とある。　＊「さやうのことも」も但し書きがあるのは、注に＜食事や酒肴の接待をさす。＞とあり、尼庵で酒が出たかどうかは疑わしいが、それなりに手厚い接待であったことを示すものらしい。

「言ふかひなくなりにし人よりも(今は何を言ってもどうにもならない、亡くなってしまった娘よりも)、この君の御心ばへなどの(この娘婿の貴公子の御気立てが)、いと思ふやうなりしを(申し分なかったのを)、よそのものに思ひなしたるなむ(再婚して、他人と思わなければならないのが)、いと悲しき(とても寂しい)。など、忘れ形見をだに留めたまはずなりにけむ(どうして、忘れ形見を残してくださらなかったのか)」

と、恋ひ偲ぶ心なりければ(と尼君は中将を恋い偲ぶ気持ちなので)、たまさかにかくものしたまへるにつけても(稀にこのようにお見えになるにつけても)、*珍しくあはれにおぼゆべかめる問はず語りもし出でつべし(不思議な初瀬観音の慈悲深い授かり物に思えるような例の彼女の話も聞かれもしないのに話し出してしまいそうです)。　＊「めづらしくあはれ」は＜目を見張る驚くべき感激＝初瀬観音から授かった故姫の形代としての彼女(常陸姫)＞と読んで置く。

*姫君は(尼君に姫君の役割を期待されている常陸女は)、*我は我と(尼君が故姫を偲ぶ意向とは別に、自分なりに)、*思ひ出づる方多くて(この村雨に思い出される大将殿との宇治行きを)、眺め出だしたまへるさま(遠く眺めていらっしゃる姿が)、いとうつくし(とても風情があります)。　＊「ひめぎみは」は注に＜『集成』は「中将の相手役に偽せられているこの場面にふさわしい呼び方」。『完訳』は「浮舟の呼称として「姫君」は初出。恋物語の女主人公の趣」と注す。＞とある。常陸姫自身は記憶が戻っているが、妹尼君には未だ自分の身の上を打ち明けていない。こういう段階で本文に「姫君」と呼称されると、常陸姫目線の文に見えがちで紛らわしい。が、本文を変える訳には行かないので、今後は言い換え文に於いては「常陸姫」を使わずに＜常陸女＞と呼称する。　＊「われはわれ」は常陸女本人は尼君の意向とは＜別に、自分なりに＞という言い方だから、「姫君」の言い換えの方に＜娘の身代わりを期待する尼君の意向＞を明示補語して置く。　＊「おもひいづるかた」は、匂宮との橘の小島遊びかと思ったが、それは二月の春のことだったので違うようで、秋の思い出となると、薫殿が三条小家から常陸女を宇治へ連れ出した昨年の九月十三日の雨の日のこと(東屋巻六章五段)らしい。

白き単衣の(しろきひとへの、白い裏地も無い服の)、いと*情けなく*あざやぎたるに(とても素っ気ない目の詰んだ平織地に)、袴も*桧皮色にならひたるにや(袴も他の尼女房を見習った桧皮色で)、光も見えず黒きを着せたてまつりたれば(暗い黒っぽいものをお着せ申し

ていたので)、「かかることどもも(こういう装束も)、見しには変はりてあやしうもあるかな(昔と違って変わった風合いだ)」と思ひつつ(と常陸女は思いながら)、*こはごはしう*いららぎたるものども着たまへるしも(硬い生地の肌触りの悪いものを着ていらっしゃっても)、いとをかしき姿なり(とても美しい姿なのでした)。　*「なさけなし」は<無風流だ。趣きがない。>と古語辞典にあるが、織物の形容なので<素っ気ない=無地の平織>ということなのだろう。　*「あざやぐ」は<はっきりしている>と古語辞典にある。色なら純白、織りならきっちりと目の詰んだ無地、だろうか。*「ひはだいろ」は本当にヒノキの皮肌の裏側の赤茶色のことで、蘇芳を酸化定着させた小豆色の濃いものとかいう説明もあったが、その辺はさっぱり分からない。何でも、蘇芳はアルカリ定着させると赤紫色になるそうだが、そも蘇芳は簡単に入手できた染料なのか、日本で普通に育つ木なのか疑わしい。何だか良く分からないが、とにかく「桧皮色」は地味だったらしい。　*「こはごはし」は<ゴワゴワしている=硬い生地>。　*「いららぐ」は<チクチクする=肌触りが悪い>。

御前なる人びと(妹尼君の前に侍している尼女房たちが)、

「故姫君のおはしたる心地のみしはべりつるに(回復なさった貴女が故姫君がいらっしゃるようにばかり思えますので)、中将殿をさへ見たてまつれば(中将殿までお見受け申しますと)、いとあはれにこそ(とても感慨無量です)。同じくは(どうせなら)、昔のさまにておはしまさせばや(あの貴女と中将殿とが昔のように御夫婦でいらっしゃれば良いのに)。いとよき御あはひならむかし(とてもお似合いの御二人です)」

と言ひ合へるを(と言い合っているのを)、

「あな、いみじや(まぁとんでもない)。世にありて(生き延びて)、いかにもいかにも(どういう人であれ)、*人に見えむこそ(結婚するなど、有り得ない)。それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき(それでは、昔の辛い宿命が思い出されてしまう)。さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ(そういう話は断ち切って忘れたい)」と思ふ(と常陸女は思います)。　*「人に見えむこそ」は注に<結婚すること。係助詞「こそ」の下に「あるまじけれ」などの語句が省略。>とある。

［第三段　中将、浮舟を垣間見る］

尼君入りたまへる間に(尼君が奥で休んでいらっしゃる間に)、客人(まらうと、客人の中将は)、雨のけしきを見わづらひて(雨足の降り止まぬを見て立ち去り難く)、*少将と言ひし人の声を聞き知りて(かつて少将の君といって仕えていた尼女房の声を聞きつけて)、呼び寄せたまへり(呼び寄せなさいました)。　*「せうしゃう」は注に<かつて少将の君という女房名で仕えていた尼女房。>とある。

「昔見し人びとは(昔見知った女房たちは)、皆ここにものせらるらむや(皆此処にいらっしゃるのだろう)、と思ひながらも(と思いながらも)、かう参り来ることも難くなりにたるを(このように参り来るのも難しくなったのを)、心浅きにや(薄情だと)、誰れも誰れも見なしたまふらむ(皆思っているのだろうか)」

などのたまふ(と仰います)。仕うまつり馴れにし人にて(この尼女房は故姫君に親しく仕えていた人で)、あはれなりし昔のことどもも思ひ出でたるついでに(中将は懐かしい昔話をしたついでに)、

「かの廊のつま入りつるほど(さっき廊下の端から廂に入る時に)、風の騒がしかりつる紛れに(風が強く吹いて)、*簾の隙より(簾の隙間から西奥部屋に)、なべてのさまにはあるまじかりつる人の(普通の器量ではなさそうな人の)、うち垂れ髪の見えつるは(長い髪が垂れたのが見えたのは)、世を背きたまへるあたりに(尼君たちのお住まいに)、誰れぞとなむ見おどろかれつる(誰だろうかと驚かされました)」とのたまふ(と仰います)。　＊「すだれのひま」は寝殿(と言っても規模は小さいのだろうが)の南廂を東西に分ける簾が風で捲れた時のこと、と思って置く。と言っても、明示するほどの根拠は無いが、場面に合理性が無いと落ち着かないので左様補語する。

「*姫君の立ち出でたまへるうしろでを(姫君が立って奥へ出ていかれる後ろ姿を)、見たまへりけるなめり(中将殿はお見受けなさったらしい)」と思ひ出でて(と少将尼は考えて)、「ましてこまかに見せたらば(もっと詳しく知らせたら)、*心止まりたまひなむかし(中将殿は姫君に執心なさるだろう)。昔人は(故姫君が)、いとこよなう劣りたまへりしをだに(この姫君よりは数段劣る器量でいらしたのでさえ)、まだ忘れがたくしたまふめるを(まだ忘れ難くしていらっしゃるようなのだから)」と、心一つに思ひて(と独り合点して)、　＊「ひめぎみ」は少将尼の内心文で呼称された常陸女らしく、此処の尼女房たちからも常陸女は「姫君」たらん存在として認識されていたようだ。　＊「こころとまる」は＜心が引かれる。興味を持つ。＞とも古語辞典にあるが、既に中将は常陸女に興味を持っているので、此処では＜心が残る。執着する。＞という語用だろう。

「過ぎにし御ことを忘れがたく(庵主さまが亡くなった姫君を忘れ難く)、慰めかねたまふめりしほどに(お苦しみだった時に)、*おぼえぬ人を得たてまつりたまひて(故姫君に準え得るかの貴女を、思いがけずお抱え申しなさって)、明け暮れの見物に思ひきこえ*たまふめるを(毎日甲斐甲斐しく御世話なさっていらっしゃいますので)、うちとけたまへる御ありさまを(その寛いでいらっしゃる御姿を)、いかで御覧じつらむ(きっと御覧になったのでしょう)」と言ふ(と言います)。　＊「おぼえぬひと」という言い方で一定の説得力ある説明になっているとしたら、この「おぼえぬ」は＜思いがけない、意外な＞では不十分に見える。かと言って、「おぼゆ」に＜思わされる、感じられる＞以外の語意も想定できず、となると「意外だ」という言い方の方に工夫が必用のようだ。ヒントは下の「みものにおもふ(張り合いに感じる)」で、それは故姫の形代に見立てるという意味だから、そこまで明示してしまうと発言文としては言い過ぎの感はあるが、現代語文の分かり易さを優先して明示補語して置く。　＊「たまふめる」の「めり」は推量意ではなく婉曲表現の丁寧語だろう。

「かかることこそはありけれ(そんなことがあったのか)」とをかしくて(と中将は興味を引かれて)、「何人ならむ(なにびとならむ、どんな人なのだろう)。げに(確かに故君を思わせるように)、いとをかしかりつ(とても美しかった)」と、ほのかなりつるを(と仄かに見かけた姿から)、なかなか思ひ出づ(全体を想像してみます)。こまかに問へど(中将は詳しい様子を尋ねたが)、そのままにも言はず(少将尼はありのままには答えません)、

「おのづから聞こし召してむ(そのうちお分かりになるでしょう)」

とのみ言へば(とだけ言うので)、うちつけに問ひ尋ねむも(焦って問い尋ねるのも)、さま悪しき心地して(如何にも物欲しそうで、みっともない気がして)、

「雨も止みぬ(雨も止みました)。日も暮れぬべし(急がないと、日暮れてしまいます)」

と言ふにそそのかされて(と従者が言うのに促されて)、出でたまふ(中将は尼庵を後になさいます)。

［第四段　中将、横川の僧都と語る］

前近き女郎花を折りて(植え込みの手近な女郎花を手折って)、「*何匂ふらむ(どうして此処に咲いているのか)」と口ずさびて(と口ずさんで)、独りごち立てり(一人艶な気分で中将は立ち去ります)。　＊「なににほふらむ」は注に＜中将の詞。『源氏釈』は「ここにしも何匂ふらむ女郎花人のものいひさがにくき世に」（拾遺集雑秋、一〇九八、僧正遍昭）を指摘。＞とある。引歌の筋は＜選りに選って此処で、どうして咲き群れているのかオミナエシは、人がすぐ悪い噂を立てるのに＞で、オミナエシの群生が若い女たちの例えになって、女人禁制の仏道修行に障る、と冗句を飛ばしたものらしい。つまり、一節の「ここにしも」を掛けた言い回しのようだ。

「*人のもの言ひを(僧正遍昭の歌をお引きになるとは、姫君に興味があっても、噂が立つことは)、さすがに思しとがむるこそ(やはり気にしていらっしゃるんですね)」　＊「ひとのものいひを」は中将が引いた僧正遍昭の歌を踏まえた物言いで、教養ある会話の趣きらしい。

など、古代の人どもは(などと古風な老尼たちは)、ものめでをしあへり(中将の嗜みを褒め合っていました)。

「いときよげに(中将殿はとても美しく)、あらまほしくもねびまさりたまひにけるかな(申し分なく出世なさいました)。同じくは(できれば)、昔のやうにても見たてまつらばや(昔のように婿殿として拝し申したいものです)」とて(と老尼が言うと)、

「*藤中納言の御あたりには(中将殿は藤中納言の御宅には)、絶えず通ひたまふやうなれど(途絶え無く通っていらっしゃるらしいが)、心も止めたまはず(其方の姫君には熱心ではいらっしゃらず)、親の殿がちになむものしたまふ(親と仲良くしていらっしゃる)、とこそ言ふなれ(ということのようです)」　＊「とうちゅうなごん」は注に＜以下「こそ言ふなれ」まで、妹尼君の詞。中将は現在、藤中納言の娘のもとに婿として通っている。この藤中納言は系図不詳の人。＞とある。中将は再婚していた。が、故君を忘れていない、ということか。いや、単に横川に来たついでに、気まぐれで立ち寄っただけかもしれない。やはり、もう少し中将の事情が分からないと、手探りの言い換えが続く。

と、尼君ものたまひて(と尼君も仰って)、

「心憂く(元気無く)、ものをのみ思し隔てたるなむ(ずっと心隔てなさっているのが)、いとつらき(とても残念です)。今は、なほ(もうそろそろ)、さるべきなめりと思しなして(此処の暮らしがあなたの本来の人生なのだとお考えになって)、晴れ晴れしくもてなしたまへ(明るくなってください)。

*この五年、六年、時の間も忘れず(この五、六年片時も忘れず)、恋しく悲しと思ひつる人の上も(悲しく恋しいと思って来た亡き娘のことも)、かく見たてまつりて後よりは(こうしてあなたを御世話申してからは)、こよなく思ひ忘られにてはべる(すっかり忘れられております)。思ひきこえたまふべき人びと世におはすとも(あなたを心配して探しているような親兄弟が実際はいらっしゃっても)、今は世に亡きものにこそ(もうあなたはこの世にいないものと)、やうやう思しなりぬらめ(次第に思っていらっしゃるでしょう)。*よろづのこと(あなたが此処に居る以上は、以前にどんな事情があったにせよ)、さし当たりたるやうには(その当時の事は)、えしもあらぬわざになむ(昔話になるものです)」　*「このいつとせむとせ」は注に＜妹尼君の娘が亡くなって、五六年を経過。＞とある。此処に尼君の愛娘の死後の年数が明示された。今年で、死後五年が経過した六年目と取って置く。　*「よろづのこと」は含みの多い言い方だ。尼君は、常陸女が過去を思い出していて隠している、のか、未だに過去が思い出せない、のか、確証は持てていないかもしれないが、常陸女は仔細はともかくも現実逃避をしたような口ぶりではあったので、恐らくは、思い出したが隠していると思っている、のだろう。もし、常陸女が覚醒していないのなら、この「よろづのこと」は＜何があったにせよ、今を生きる他は無い＞と常陸女を励ます言い方だが、常陸女が覚醒した上で過去を引きずっているのなら、是は＜どんな事情だったとしても、あなたは今別の世界に居る＞と慰める言い方だ。前者は＜早く元気になれば元の暮らしに戻れるだろう＞で、後者は＜此処で別の人生を生きるしかない＞だから、多分、後者の方が常陸女の救いになるし、尼君にとっても都合が良い。

と言ふにつけても(と姫君に言うと)、いとど涙ぐみて(姫君も思わず涙ぐんで)、

「隔てきこゆる心は、はべらねど(遠ざけ申してはいませんが)、あやしくて生き返りけるほどに(訳が分からず生き返ったもので)、よろづのこと夢の世にたどられて(すべてが夢のように思われまして、馴染みきれません)。*あらぬ世に生れたらむ人は(あの世で生まれ変わったら)、かかる心地やすらむ(こういう気持ちがするのだろうか)、とおぼえはべれば(と思えまして)、今は、知るべき人世にあらむとも思ひ出でず(今は身寄りがこの世に居るとも思い出せません)。ひたみちにこそ(ただあなた様を)、睦ましく思ひきこゆれ(お頼り申しております)」　*「あらぬ世」は＜別の世界＞という言い方のようだが、むしろ仏語の＜あの世＞と思った方が、と言っても「あの世」の何たるかを私は知らないが、外国に行くことが物理的にほぼ不可能だったであろう当時の実生活に於いて、にも関わらず東国を旅した常陸女にとっての別世界は外国＞よりは＜死後＞の方が現実味があったように見える。

とのたまふさまも(と仰る姿も)、げに、何心なくうつくしく(実に裏心無く可愛らしく)、うち笑みてぞまもりゐたまへる(尼君は微笑んで見守りなさっていました)。

中将は、山におはし着きて(中将は山に登って横川にお着きになって)、僧都も珍しがりて(僧都も歓迎して)、世の中の物語したまふ(世間話をなさいます)。その夜は泊りて(中将はその夜は横川の僧坊に泊まって)、*声尊き人に経など読ませて(声の良い僧侶に声明を上げさせて)、夜一夜(よひとよ、一晩中)、遊びたまふ(管弦演奏をなさいます)。　*「こゑたふときひとに〜」は注に＜『集成』は「声明で、当時のいわば声楽」。『完訳』は「声明として経を謡うこと」「僧都の心配りで、山ではめったにしない管弦の遊びをする」と注す。＞とある。

禅師の君(中将はまた、弟君の禅師と)、こまかなる物語などするついでに(細々と立ち入った話をする内に)、「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな(小野に立ち寄って故姫を偲びました)。世を捨てたれど(義母は出家なさったが)、なほさばかりの心ばせある人は(やはりあれほど風雅に通じた人は)、難うこそ(少ない)」

などあるついでに(などと話すついでに)、

「風の吹き開けたりつる隙より(ところで、風が簾を吹き開けた瞬間に)、髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ(髪のとても長い美しそうな人を見かけた)。あらはなりとや思ひつらむ(私が邸内に立ち入ったので、人目を避けようと思ったらしく)、立ちてあなたに入りつるうしろで(立って奥へ入った後ろ姿は)、なべての人とは見えざりつ(並の身分の人には見えなかった)。さやうの所に(あのような尼庵に)、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ(風情のある女は住まわせて置くべきではないのではないか)。明け暮れ見るものは法師なり(毎日目にするのは坊主なので)。おのづから*目馴れておぼゆらむ(自然に仏心が起こるだろう)。不便なることぞかし(あたら若い女に無益な事だ)」　*「目慣る(めなる)」は＜見慣れる＞。坊主を見慣れる→修行生活を普通に思う→仏心が起こる、だろうか。

とのたまふ(と仰います)。禅師の君(禅師の弟君は)、

「この春、初瀬に詣でて(この春に初瀬に詣でて)、あやしくて見出でたる人となむ(不思議な縁で見つけ出した人だと)、聞きはべりし(聞きました)」

とて、見ぬことなれば(と実際には見知らぬことなので)、こまかには言はず(詳しい話はしません)。

「あはれなりけることかな(興味深いことだ)。いかなる人にかあらむ(どういう人なのだろう)。世の中を憂しとてぞ(世の中を嫌って)、*さる所には隠れゐけむかし(大和路に隠れていたのだろう)。昔物語の心地もするかな(昔話みたいだな)」　*「さるところ」は注に＜宇治の山里をさす。＞とある。禅師は詳しい話はしなかったとあるが、宇治院かその近辺から連れ帰ったくらいの話はしたのかもしれない。が、はっきりしない。初瀬詣でとは言っているので、大和路くらいに言って置く。

とのたまふ(と中将は仰います)。

［第五段　中将、帰途に浮舟に和歌を贈る］

またの日（翌日）、帰りたまふにも（中将はお帰りになるにつけても）、「過ぎがたくなむ（素通りできない）」とておはしたり（と小野尼庵に立ち寄りなさいました）。さるべき心づかひしたりければ（供応の用意がしてあったので）、昔思ひ出でたる御まかなひの少将の尼なども（昔が思い出される給仕係の少将尼の）、袖口さま異なれども（法衣姿は以前とは違っていたが）、をかし（趣きはあります）。いとど*いや目に（迎えと違って見送りになるので、いっそう悲しそうな表情を）、尼君はものしたまふ（尼君はしていらっしゃいます）。　＊「否目（いやめ）」は＜悲しそうな目つき＞と古語辞典にある。従うが、もしかすると、「目」は＜目つき＞ではなく＜目方・程度＞かもしれない。また、「いなむ」は＜拒む。嫌がる。＞だが、「いやむ」は＜辛そうにする＞かもしれない。

物語のついでに（話のついでに）、

「忍びたるさまにものしたまふらむは（姿を隠すようにしていらっしゃる人が居るようですが）、誰れにか（どなたですか）」

と問ひたまふ（と中将はお訊きになります）。わづらはしけれど（人目を避けている姫君には迷惑に思えたが）、ほのかにも見つけてけるを（少しにしても姫の姿を見ているに中将に）、隠し顔ならむもあやしとて（隠し立てするのも却って意味ありげかと）、

「忘れわびはべりて（故君が忘れられず）、いとど罪深うのみおぼえはべりつる慰めに（ますます執着心が増す罪深さを晴らそうと）、この月ごろ見たまふる人になむ（その身代わりとして、ここ数か月御世話申している人なのです）。いかなるにか（何か事情があって）、いともの思ひしげきさまにて（とても深く思い悩んで居る様子で）、世にありと人に知られむことを（生きていることを人に知られるのを）、苦しげに思ひてものせらるれば（辛そうに思っていらっしゃるので）、かかる*谷の底には誰れかは尋ね聞かむ（この尼庵のような人目につかぬ谷底なら誰も探しに来ないだろう）、と思ひつつはべるを（と思って隠し置いておりますものを）、いかでかは聞きあらはさせたまへらむ（あなた様はどこでこの人の事を聞き出しなさったのですか）」　＊「たにのそこ」は出典参照に＜「春や来る花や咲くとも知らざりき谷の底なる埋れ木なれば」（和泉式部集−七二六）＞と指摘がある。この歌は、隠れ住むというよりは、健気に生きていても地味で目立たない卑しい私、みたいな悔しさの恨み節に見える。

といらふ（と尼君は答えます）。

「*うちつけ心ありて参り来むにだに（ただの気まぐれで、此方に参上したのだとしても）、山深き道のかことは聞こえつべし（山深い道というだけでも文句は言いたい所です）。まして、思しよそふらむ方につけては（ましてあなた様が故君に準えていらっしゃる人であってみれば）、ことことに隔てたまふまじき*ことにこそは（私を除け者になさろうというのは、あまりに不当だと文句を申さずにはいられません）。いかなる筋に世を恨みたまふ人にか（どうい

う事情で世を儚んでいらっしゃるのだろうか)。慰めきこえばや(慰め申したい)」　＊「うちつけごころ」は＜気まぐれ＞と古語辞典にある。　＊「ことにこそは」の感嘆助詞「は」は＜かことは聞こえつべけれ＞が代入される二重強調文型なのだろう。

など(などと中将は)、ゆかしげにのたまふ(興味深そうに仰います)。

出でたまふとて(お帰りになる際に)、畳紙に(たたうがみに、懐紙に)、

「あだし野の風になびくな女郎花、我しめ結はむ道遠くとも」(和歌 53―03)

「女郎花 西を向かずに 我を見よ」(意訳 53―03)

＊「あだしの」は＜墓場。死人を葬る所。＞と古語辞典にある。また、「化野(あだしの)」は大辞泉に＜京都市右京区嵯峨、小倉山の麓の野。中古、火葬場があり、東山の鳥辺山(とりべやま)と併称された。名は「無常の野」の意で、人の世のはかなさの象徴としても用いられた。[歌枕] ＞とある。「あだし野の風になびくな」は＜死に急ぐな＞。ただ、「徒(あだ)」は＜一時的だ。無駄だ。不誠実だ。＞と浮気な移り気の思い付きを示す語なので、是は＜不誠実な男に身を任せるな＞でもあって、辛気臭い歌詠みを色っぽく演出する。「しめ」は「注連縄(しめなは)」の「注連」で＜魔除けの結界→死穢祓い＞。だから、「道遠くとも、我結はむ」は＜修行が厳しくても、私が魔物と対峙してあなたを守る＞。で、当然に「占め結ふ」は＜契約を締結する＝結婚する＞で、「道遠くとも」は＜困難な事情があっても、遂には、いつかは＞あたりか。

と書きて、少将の尼して*入れたり(と書いて、少将尼から姫の部屋に届けました)。尼君も見たまひて(尼君も中将の姫への贈歌をお読みになって)、　＊「入れたり」はあまり見慣れない言い方だ。何だか、まだ物慣れない童女が小間使いするような語感に私は感じるが、どうなんだろう。「入る(いる)」自体は＜部屋の中に入る＞だから、単に動作説明かもしれない。

「この御返り書かせたまへ(御返歌なさいませ)。いと*心にくきけつきたまへる人なれば(とても礼儀正しい人ですから)、うしろめたくもあらじ(無茶をする心配はありません)」　＊「こころにくし」は＜配慮が行き届いている→分を弁えている→無理無茶をしない＞あたりだろうか。「けつく」は「気着く」で＜所作作法の態度が身に着いている＞だろうか。分かり難い言い方だ。

とそそのかせば(と促すと)、

「いとあやしき手をば(下手な字ですので)、いかでか(書けません)」

とて、さらに聞きたまはねば(と言って姫君は全く聞き入れなさらないので)、

「はしたなきことなり(返歌申さないでは失礼で、相済まない)」

とて、尼君(ということで、尼君が)、

「聞こえさせつるやうに(申し上げましたように)、世づかず(姫は世間離れして)、人に似ぬ人にてなむ(普通の人とは違いますので、御返歌なさいません)。

移し植ゑて思ひ乱れぬ女郎花、憂き世を背く草の庵に」(和歌 53―04)

女郎花 草の庵で 咲いている」(意訳 53―04)

*「おもひみだる」は＜恋い焦がれる＞と＜困り果てる＞の語用がある。また、この動詞はラ行下二段活用で未然形も連用形も「思ひ乱れ」なので、「思ひ乱れぬ」の助動詞「ぬ」は、活用語の未然形に付く打ち消しの＜(姫は)恋い焦がれない＞と、連用形に付く動作完了状態の＜(尼君自身は)困ってしまっている＞との両意が成立する。謝罪と言い訳の合わせ技みたいな。

とあり(と代返しました)。「こたみは(今回は)、さもありぬべし(そんなもんだろう)」と、思ひ許して帰りぬ(と、中将は姫の返歌が無いことも大目に見て帰りました)。

［第六段　中将、三度山荘を訪問］

文などわざとやらむは(中将は姫君に手紙を事改めて差し出すのは)、*さすがにうひうひしう(やはり修行場の尼庵には気が引けるものの)、ほのかに見しさまは忘れず(姫の仄かな印象は忘れられず)、もの思ふらむ筋、何ごとと知らねど(物思いの事情は知らないが)、あはれなれば(気になるので)、*八月十余日のほどに(はちぐぁちじふよにちのほどに、八月の十日過ぎに)、*小鷹狩のついでにおはしたり(小鷹狩りの際に小野尼庵に立ち寄りなさいました)。　*「さすがに」は分かるような分からないような、どうも意味がはっきりしない言い方だ。いい年をして今さら、は恋の道には無い話だろうから省くとして、故君の実母の家に気恥ずかしい、というのも、尼君自身が故君代わりに見立てている相手なのだから、その姫が中将と親しくなることは尼君の意向にも沿うだろう。となると、中将自身も言っていたが、修行場であるべき尼庵に「不便なることぞかし」(四段)という抹香臭い理屈が最も尤もらしく見える。　*「八月十余日のほど」は、この手習巻の話が蜻蛉巻末の時点に追い着いたくらいの展開だ。　*「小鷹」は＜小形のタカ。ハヤブサ・ハイタカ・ツミなどの総称。＞と大辞泉にあり、「小鷹狩り」は＜小鷹を使ってウズラ・ヒバリなどの小鳥を主に狩る。秋に行う鷹狩り。＞と古語辞典にある。因みに、「大鷹(おほたか)」は＜鷹の雌。雄より大きいので言う。＞とあり、是を用いてツル・ガン・キジなどの大形の鳥を捕える冬に行う狩りを「大鷹狩り」というらしい。

例の、尼呼び出でて(中将は担当の少将尼を呼び出して)、「一目見しより(人目見てから)、静心なくてなむ(気になって仕方ありません)」とのたまへり(と取次ぎで姫君に打ち明けなさいました)。いらへたまふべくもあらねば(姫が応えるはずもないので)、尼君(尼君が)、

「*待乳の山(実はお待ちかね)、となむ見たまふる(かと思いますよ)」　*「待乳の山(まつちのやま)」は注に＜妹尼君の詞。『異本紫明抄』は「誰をかも待乳の山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」(小町集)を指摘。『完訳』は「誰か他に思う人がいるか」と注す。＞とある。「まつちやま」は「真土山」ともあり、大辞泉には＜奈良県五條市と和歌山県橋本市との境にある山。吉野川(紀ノ川)北岸にある。［歌枕］＞

とある。「まつち」を「待つ乳」と表記するのは万葉仮名の当て字だろうか。それとも、「乳」に＜親しい人＞という語用でもあるのだろうか。その辺の解説は手近な所では見当たらない。もっとあっさり「待つ地」で良いんじゃないかと思ったら、「地」は古語では「ぢ」らしい。でも、掛詞語用なら「ぢ」を「ち」に変えることぐらい許されそうな気もするが、どうなんだろう。まぁ、その辺はそれらしい雰囲気が有るくらいで流して置く。さて引歌だが、真土山に咲くオミナヘシの群生が美しい、という風情に「まつち」の言葉遊びで詠んだ歌と仮定して、一般論として歌筋を見れば＜きっと誰かを待っている真土山のオミナエシ、こんなに綺麗に咲いているんだから、秋になったら来ると約束した人がいるようだ＞で、是に＜私みたいに＞を付け加えなくても、心楽しい雰囲気のある歌に見える。多分、尼君もそういう解釈で中将に＜きっと姫はあなたをお待ちかねですよ＞と愛想を言ったのだろう。ただ、「あき」は「飽き」にもよく洒落語用で掛けるらしいので、「あきとちぎれる」が＜飽きて千切れた→別れた＞で、歌意が＜待ち人来らずの悲しい定めの私＞という皮肉な歌詠みも成立するのかもしれない。が、だとしたら、それらしい背景説明の詞書でもないと、普通はオミナエシの群生に悲しみは準えないだろう。ところで、何れにしても、「誰か他に思う人がいるか」という『完訳』の解釈は私には意味不明だ。

と言ひ出だしたまふ(と部屋の中から中将にお答え申しなさいます)。対面したまへるにも(中将は客間に出ていらっしゃった尼君と対面なさった時も)、

「心苦しきさまにてものしたまふと聞きはべりし人の御上なむ(思い悩んでいらっしゃるとお聞きした姫君の御事情を)、残りゆかしくはべりつる(詳しくお聞かせ願いたい)。何事も心にかなはぬ心地のみしはべれば(私も故君を失ってから、何事も張り合いの無い人生ですので)、山住みもしはべらまほしき心ありながら(出家して山修行もしたい気持もありながら)、許いたまふまじき人びとに思ひ障りてなむ過ぐしはべる(責任ある立場なので、左様な身勝手をお許し下さらない一族郎党に憚って宮仕えしております)。

*世に心地よげなる人の上は(この世に満足していそうな人である今の妻は)、かく屈じたる人の心からにや(私がこのように屈折した気持ちの所為か)、ふさはしからずなむ(相性が良くないのです)。もの思ひたまふらむ人に(悩みの分かる人に)、思ふことを聞こえばや(相談申したいものです)」　*「世に心地よげなる人の上は」は注に＜現在の妻、藤中納言の娘。屈託なげに楽しそうにしている性格の人。＞とある。「ひとのうへ」は＜人の事情＞という言い方だが、此処での「人の上」は＜(そういう)人である妻＞という言い方なのだろうか。まぁ、そう思って置く。とにかく、妻を悪く言うのは、事実の有無に関わらず、男の遊び心に弾みを付けるものではありそうだ。

など、いと心とどめたるさまに語らひたまふ(と、深い思いがありそうにお話しなさいます)。

「心地よげならぬ御願ひは(悩みのご相談を)、聞こえ交はしたまはむに(話し合いなさるには)、つきなからぬさまになむ見えはべれど(姫は相応しい相手に思えますものの)、*例の人にてはあらじと(姫本人は出家せずにはいられないと)、いとうたたあるまで世を恨み*たまふめれば(相当頑なに現世を嫌っていらっしゃるようなのですが)、残りすくなき齢どもだ

に(私たちのように、余命少ない老人でさえ)、今はと背きはべる時は(いざ出家するという時は)、いともの心細くおぼえはべりしものを(とても寂しい気がしましたので)、*世をこめたる盛りには(姫のように多くの事情を抱え込んだ女盛りの身には)、*つひにいかがとなむ(本当に出家して良いのかと)、見たまへはべる(私は思っております)」　＊「れいのひとにてはあらじ」は注に＜浮舟の出家の決意。＞とある。「例の人」は＜普通の人＝入信していない人＞だろうか。今までにない語用かと思う。　＊「たまふめれば」の接続助詞「ば」は、渋谷校訂では順接で下に＜いと難し＞などが省かれた文としてか、此処で句点としてあるが、この尼君の発言文全体の文意からして＜～ということですが＞という逆接で下に続く構文と私は読んで置く。　＊「よをこむ」は「世を込む(多くの事情を抱え込む)」だろうか。非常に分かり難い。　＊「ついにいかがとなむ」は＜結果はどうなるのか→そういう結果で良いのか＞と読んで置く。

と(と尼君は)、親がりて言ふ(親代わりを気取って言います)。入りても(尼君は部屋に入って姫君にも)、

「情けなし(あまりに非礼で、あきれます)。なほ、いささかにても聞こえたまへ(やはり少しはお返事なさいませ)、かかる御*住まひは(そのように固辞なさっては)。*すずろなることも(他人の好意に)、あはれ知るこそ世の常のことなれ(応えるのが人の道です)」　＊「すまひ」は「住まひ」と表記されているが、＜米国議会図書館アジア部日本課所蔵「絵入源氏物語」Tenarai＞の写本画像(58/138)では＜御すまゐハ＞とあるようであり、京都大学本[v.51,p.079]や保坂本[手習、41/98]では判然としないが、少なくも「住まひ」ではなく仮名のようで、文意からして、此処は＜争ひ(すまひ、争う・辞退する)＞と見做さないと意味が通らないように見える。で、更に、此処の「御争ひは」は倒置構文で冒頭の「情けなし」に掛かるので、此処で句点を打ち一文節とすべきだ。　＊「すずろ」は＜その場でフッと思うこと→場当たりのはかないこと→頼りないもの→軽率な事＞でもあり、それは反面＜即妙な事→その場を打開する知恵→新展開→生き延びる手段＞かもしれない。それが、その場で感じるフワフワ・ソワソワする期待感で、それは確かな裏付けなどない浮ついたものだが、確かな可能性の一提示ではあり、それが無ければヒトは前進できない核心概念でもあり、それを時に情緒と言い、風情と言い、趣きと言い、面向くと言う。となると、此処の尼君の台詞は非常に哲学的で言い換えは至難だ。作者の本心かもしれない。

など、こしらへても言へど(などと取り成すように言うが)、

「人にもの聞こゆらむ方も知らず(男の人との話し方も知らず)、何事もいふかひなくのみこそ(何を話せば良いのか分かりません)」

と(と姫君は)、いとつれなくて臥したまへり(まるで素っ気なく横になりなさいました)。

客人は(まらうとは、客間の中将は姫のお返事が無いので)、

「*いづら(どうなっているんだ)。あな、心憂(ちょっと変だ)。*秋を契れるは(古歌の引用で、姫が私の秋の来訪を待っている、かのように尼君が仰ったのは)、すかしたまふにこそありけれ(根拠の無い方便で、私をからかいなさったようだ)」　＊「いづら」は＜さあ、どう

なんだ＞と返事を促す語用が多いらしいが、此処ではいつまでも姫の返事が無い事に苛立って＜一体どうなっているのか＞と言ったのだろう。　*「秋を契れるは」は注に＜尼君の「待乳の山の」の引歌「誰をかも待乳の山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」（小町集）の下句を受けた表現。＞とある。やはり、この引歌は＜秋になったら会おうと約束した人がいるらしい＞と秋の野に可憐に咲くオミナエシを愛でているようだ。

など、恨みつつ(と不満げにこう詠みます)、

「松虫の声を訪ねて来つれども、また萩原の露に惑ひぬ」（和歌 53―05）

「松虫を 萩に探して 露まみれ」（意訳 53―05）

*注に＜中将の贈歌。「松虫」「待つ」の懸詞。「萩原」は浮舟を喩える。＞とある。「マツムシ」と「ハギハラ」は付き物なのだろうか。確かに、どちらも秋の季節物ではありそうだ。が、特に「萩原」を引く理由は何なのか。「また」とあるので、前回の訪問で何か「萩原」に因んだ話でもあったかと見直したが、分からない。「谷の底」とか「山深き道」とか唐突感のある引用はあったので、いくらかの脱稿があるのかもしれないが、それは単に私の素養不足かもしれないし、分からない。

「あな、いとほし(あら、いやだ)。これをだに(せめて、この御返歌だけでも、なさいませ)」

など責むれば(と尼君は姫を急き立てたが)、さやうに世づいたらむこと言ひ出でむもいと心憂く(姫はそのように色恋めいたことを口にするのもとても厭で)、また、言ひそめては(また、一度返歌すれば)、かやうの折々に責められむも(こういうことが度重なりそうなのも)、むつかしうおぼゆれば(煩わしく思えたので)、いらへをだにしたまはねば(尼君に御返事すらなさらないので)、あまりいふかひなく思ひあへり(尼君は少将尼とあきれていました)。

尼君、早うは今めきたる人にぞありける名残なるべし(尼君は出家前は当世風の人だった名残りでしょうか)、

「秋の野の露分け来たる狩衣、葎茂れる宿にかこつな　（和歌 53-06）

「此処に来る 前に濡れてた 狩衣　（意訳 53-06）

*注に＜尼君の返歌。浮舟が詠んだようにとりつくろって詠む。「露」の語句を用いて返す。＞とある。あなたには他にも女が居るでしょうから、そんなに急ぎなさいますな、と女郎屋の女将みたいな口ぶり。

となむ(とのように姫は)、わづらはしがりきこえたまふめる(妬いていらっしゃるようです)」

と言ふを(と言うのを)、*内にも、なほ(御簾内の尼女房たちも)「かく心より外に世にありと知られ始むるを、いと苦し(このように私の気持ちに反して生きているのを世間に知ら

れ出すのは、とても困る)」と思す心のうちをば知らで(とお思いになる姫君の心情が分からず)、男君をも飽かず思ひ出でつつ(故君ばかりか婿殿までも今も懐かしく思って)、恋ひわたる人びとなれば(恋い慕っている尼庵の人々だったので)、　＊「うちにもなほ」は下に「こひわたるひとびとなれば」と説明されるので＜御簾内の尼女房たち＞らしい。

「かく、*はかなきついでにも(このような、ちょっとした機会に)、うち語らひきこえたまはむに(気軽に御話し合いなさっても)、*心より外に(自分が望んだものではないので)、よにうしろめたくは見えたまはぬものを(何も世間からふしだらとは思われなさらないのに)。世の常なる筋には思しかけずとも(特に男女の仲と意識せずに)、情けなからぬほどに(挨拶程度に)、御いらへばかりは聞こえたまへかし(御返事くらいはなさるべきです)」　＊「はかなきついで」と尼女房は言うが、中将は姫君に会うことが目的で、むしろ小鷹狩りを口実に、小野尼庵を訪れている。が、是は女房の発言文なので、語意のまま言い換える。　＊「こころより」は＜自分が望んで＞。「ほかに」は＜~では無くて＞。

など(などと)、ひき動かしつべく言ふ(姫を中将の前に引き出しそうな勢いで言います)。

［第七段　尼君、中将を引き留める］

*さすがに(此処まで来ると、さすがに姫君は)、かかる古代の心どもにはありつかず(このような古風な老人たちにも似つかわず)、今めきつつ(色気づいて)、腰折れ歌好ましげに(下手な歌を楽しそうに)、若やぐけしきどもは(若やぐ尼女房たちの態度が)、*いとうしろめたうおぼゆ(その内に中将の手引きもしかねないと、とても不安に思えます)。　＊「さすが」は「然為来は」の音便だろうか。「さすがに立派だ」という正評価語用なら＜いろいろ困難な事情があったが、本来の自力が発揮されて好結果を見た＞くらいの言い方だ。しかし、「さすがに困る」という負評価語用だと、「が」が逆接の接続助詞に転用されて＜その物性からして当然になるべくしてなっている事態ではあるが＝そうはいっても、しかし＞という言い方になるようだ。厳密な語意や文法解釈は知らないが、大体そんな言い方で語用しているのは中古文でも現代語文でも同じかと思う。が、古文では、それもこの物語では特に、主語や目的語の省略が多いので、この「さすがに」が、どういう文脈の、どういう文型の、どういう構文の、どういう文意で使われているのかが非常に分かり難く、そもそもが＜然るべく＞という曖昧な語意を持つ語なので、意味の特定が紛らわしい。にも関わらず、重要な文意を持つ語なので始末が悪い。此処でも、負評価語用らしいことは否定語が続くので割と容易に察しが付くが、主語や目的語は分かり難い。とはいえ、「さすがに」は上文を受けて、同じ話題で叙述を続ける事を示す副詞なので(その意味では、此処での段替えは大いに疑問)、姫君と尼女房の何方かが主語で何方かが目的語であることは分かっている。で、成立し得る文意を探った結果、この「さすがに」の主語は姫で、目的語は「ひき動かしつべく言ふ」尼女房たちだ、と私は読む。　＊「いとうしろめたうおぼゆ」は注に＜『完訳』は「浮舟は、誰かが強引に中将を手引しかねないと不安である。以下、己が悲運の身を思う」と注す。＞とある。従って明示補語する。

「限りなく憂き身なりけり(どうしようもなく辛い運命だ)、と見果ててし命*さへ(と見捨てた命だというのに)、*あさましう長くて(意外なことに永らえて)、いかなるさまにさすら

ふべきならむ(この先、どのように流浪するのだろう)。ひたぶるに亡き者と人に見聞き捨てられてもやみなばや(ただただ死んだものとして皆に忘れ去られてしまいたい)」　＊「さへ」は「さへあるに」の短縮と見做して置く。　＊「あさまし」は＜なさけない＞ではなく、此処では＜意外だ＞。

と思ひ臥したまへるに(と姫君は思って臥していらっしゃったが)、中将は、おほかたもの思はしきことのあるにや(中将は、何か人生全般に悩みでもあるのか)、いといたううち嘆き(とても深く溜息を吐いて)、忍びやかに笛を吹き鳴らして(寂しい調子で笛を吹き鳴らして)、

「鹿の鳴く音に」　*注に＜中将の詞。和歌を口ずさむ。『源氏釈』は「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覚ましつつ」（古今集秋上、二一四、壬生忠岑）を指摘。＞とある。鹿が鳴くのは秋に限らないだろうが、「鹿」が秋の季語になっていることについて、「季語めぐり」というブログサイトに＜鹿が秋の季語とされるのは、牡鹿（おじか）が牝鹿（めじか）を恋うてもの悲しい声をあげる交尾の時期が秋だからである。なお、交尾の後、妊娠した鹿は孕鹿（はらみじか）と呼ばれ、こちらは春の季語となる。また、その後生まれた鹿の子（かのこ・しかのこ）は夏の季語となる。秋の季語のつもりで子鹿という語を用いると、季節感のちぐはぐな俳句になるので気をつけたい。＞という記事があって面白かった。だから、この「しかのなくねに」は＜姫を恋しがって、私も笛を吹いてみたんだが、返事が無いとは侘しいものだ＞という気持ちを込めたもののようだ。

など独りごつ*けはひ(と古今集の歌をくちずさむ仕草で気持ちを表す貴族らしさは)、＊まことに*心地なくはあるまじ(なるほど尼君が仰ったように礼儀正しく、育ちがお良ろしそうです)。　＊「けはひ」は「気這ひ」で、ざっと＜身についた所作の素振り＞みたいなことらしい。が、此処での語用は「まことに」という軽口口調に掛かる言い方なのでちょっとクセがありそうだ。　＊「まことに」は、中将のこの見え透いた演出の形容なので、しみじみとした言い方ではなく、ほとんど揶揄した冗句だ。　＊「ここちなし」は尼君が姫に中将の人柄を上品な紳士だから安心できるということで、「いと*心にくきけつきたまへる人なれば」（五段）と説得した事を受けた言い方なのだろう。それにしても此処の所、くせのある言い回しが続いて難解だ。ルポ風の当時の現代語文、という趣きの所為だろうか。

「過ぎにし方の思ひ出でらるるにも(此方に伺うと、故君が思い出されて)、*なかなか心尽くしに(却って悲しみが募りますが)、今はじめてあはれと思すべき人はた(今新にそんな私をご理解頂けそうな人もまた)、難げなれば(いらっしゃらないようなので)、*見えぬ山路にもえ思ひなすまじうなむ(穏やかな山寺とも思われません)」　＊「なかなか」は何に対して何が＜却って＞なのか分からず、文意が取り難いが、それもそのはずで、比較対象は下にある「見えぬ山路＝心穏やかになれそうな尼庵」のようで、それにも関わらず中将は「こころづくし(物思い＝心騒がしい)」だということらしく、言って見れば前フリだ。　＊「みえぬやまぢ」は注に＜『源氏釈』は「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（古今集雑下、九五五、物部吉名）を指摘。＞とある。この古今集歌は、作者のお気に入りなのか何度も引かれていて、それは多分、「同じ文字なきうた」と詞書されている通りの頓知の見事さに拠る所が大きいのだろうが、此処では歌筋の「世の憂きめ見えぬ山路＝悩みなき山修行＝心穏やかになれる山寺」を引いている。

と(と中将が)、恨めしげにて出でなむとするに(不満そうにして帰ろうとすると)、尼君(あ尼君が)、

「など、*あたら夜を御覧じさしつる(どうして、せっかくの満月にお月見をなさらないのですか)」　＊「あたらよを」は注に＜『源氏釈』は「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」(後撰集春下、一〇三、源信明)を指摘。＞とある。六段に「八月十余日のほどに小鷹狩のついでにおはしたり」とあった。ほぼ、中秋の満月の頃。

とて、ゐざり出でたまへり(と居座って縁先へ出ていらっしゃいました)。

「何か(いえ、もうそれは)。*遠方なる里も(奥まった部屋の人の気持ちも)、試みはべれば(確かめましたので)」　＊「をちなるさと」は注に＜「遠方なる里」は宇治の地名。引歌がありそうだが未詳。＞とある。引歌が未詳なら、「宇治の地名」と言える根拠は何か。私には分からないことなので明示できない。ただ、出典参照には＜「ここにまた我が飽かぬ月を山の端の遠方の里には遅しとや待つ」(古今六帖一--一七四)＞と指摘があって、是を引いたとすれば下に語られる「山の端近き宿」に繋がる展開の情緒も深まりそうだが、この歌の背景も私には調べが着かず、特段にこの場面との一致も主張できない。それでも、話の前フリくらいに見做して展開を楽しむ分には十分に的確な引用指摘に見えるが、校訂者自身が「未詳」としているものを、私が差し出口でケチをつけるのは止めて置く。

など言ひ*すさみて(と中将は言い捨てて)、「いたう好きがましからむも(これ以上言い寄るのも)、さすがに便なし(やはり自分には似合わない)。いとほのかに見えしさまの(ほんの少し見かけた貴女の姿が)、目止まりしばかり(目に止まったので)、つれづれなる心慰めに*思ひ出づるを(故君を失ったむなしさを慰める人だろうかと考えてみたが)、あまりもて離れ(あまりに余所余所しい)、*奥深なるけはひも所のさまにあはずすさまじ(気取った態度も親しみのある此処の尼庵の印象とは違って期待外れだ)」と思へば(と思って)、帰りなむとするを(帰ろうとするが)、笛の音さへ飽かず、いとど*おぼえて(尼君は中将の笛の音が懐かしく、このままでは残念と、いっそう強く思えて)、　＊「すさむ」は＜気が向く＞でもあるようだが、意外に強い語感で制止出来ずに＜進んでしまう＝荒れる＝嫌う＞という言い方でもあるらしく、この「言ひ進む」は＜言い捨てる＞だろう。　＊「おもひいづ」は＜思い出す＞ではなく＜考え出す＞。　＊「おくぶかなるけはひ」は＜奥ゆかしい物腰＞ではなく＜気取った態度＞だろうか。分かり難い語用だ。　＊「おぼえて」の主語は妹尼君らしい。こういう文中で主語が変わる場合の主語省略は、とても紛らわしい。

「深き夜の月をあはれと見ぬ人や、山の端近き宿に泊らぬ」(和歌 53-07)

「此処でなら 月見風情が 分かります」(意訳 53-07)

*注に＜妹尼君から中将への贈歌。前の「あたら夜の」歌を踏まえた詠歌。「月」を浮舟に喩える。『完訳』は「中将の求婚を受諾しようとする歌」と注す。＞とある。『完訳』の注は私には意味不明だ。「山の端(やまのは)」は＜山の稜線＞で月が隠れる所。「山の端近し」は＜月が間近に見えて特に味わい深い＞という意味だろうか。小野尼庵は場所柄から「山の端近き宿」なので、其処に「泊まらぬ(や)」と呼び掛ければ＜此処に泊ま

りませんか＞と言っていることになる。状態の助動詞「ぬ」が連用形ではなく未然形に付く面白さを作者が意図しているのかどうかは分からないが、その紛らわしさはある。が、それ以上の意味があるのかどうかは私には分からず、それだけの語意なら是は＜月見の情緒を知らない人よ、月が間近に見えるこの宿に泊まってみませんか、きっと堪能できますから＞という、三十一文字の字数は合っていても、情感表現ではなく宣伝文句のようで、およそ歌といえるものなのか疑わしい。と思ったら、下に「なまかたはなる言(中途半端な歌)」とあるので、少なくも左様に読むことが此処では順当でありそうだと知れる。

と、なまかたはなることを(と贈歌とはいえ、心情ではなく誘い文句のような変な歌を)、

「かくなむ、聞こえたまふ(このように姫も申していらっしゃいます)」　*注に＜妹尼君の詞。『集成』は「(浮舟が) こう申し上げていられます。浮舟の詠んだ歌だと、とっさにいつわって言う」と注す。＞とある。この尼君の嘘を中将が真に受けたとは思えないが、助平心が根にあるので、もう少し騙されみようか、とは思うのだろう。

と言ふに(と言うと)、心ときめきして(中将はまた期待して)、

「山の端に入るまで月を眺め見む、閨の板間もしるしありやと」(和歌 53-08)

「そうですか せっかくだから そうします」(意訳 53-08)

*注に＜中将の返歌。「山の端」「月」「見る」の語句を用いて返す。「宿」を「閨の板間」とずらして返す。『完訳』は「閨の隙間からさし込む月光の風情。月を眺め続け、閨に近づきたい気持」と注す。＞とある。「閨の板間(ねやのいたま)」は＜板張りの寝室＝寝室＞で、「閨の板間もしるしありや」は＜寝室への誘いの知らせもあるだろうか＞。また、「板間」は＜板と板との隙間＝わずか＞だから、「板間もしるしありや」は＜少しでもその兆しがあるなら＞でもありそうだ。もう殆ど「山の端＝閨」の艶な歌詠みなのだろう。

など言ふに(と言う時に)、この*大尼君(母尼君が)、笛の音をほのかに聞きつけたりければ(中将の笛の音を微かに聞きつけて)、*さすがにめでて出で来たり(老齢にも関わらず、その風雅な気配を喜んで表に出て来ました)。　*「おほあまぎみ」は＜母尼君＞。今まで何処に居たのか、と思うような俄の登場。　*「さすがに」は注に＜『完訳』は「八十余歳の老齢なのに」と注す。＞とある。

ここかしこうちしはぶき(母尼君は此処のところ咳き込みがちで)、あさましきわななき声にて(聞き取れないほどの震え声で)、*なかなか昔のことなどもかけて言はず(ところが昔が懐かしいはずの老人なのに、昔話は一切しません)。誰れとも思ひ分かぬなるべし(中将が誰かとも分からないようです)。　*「なかなか」は＜老人なのに＞と読んで置く。

「いで(さあ、あなたは)、その*琴の琴弾きたまへ(その古琴をお弾きなさい)。横笛は、月にはいとをかしきものぞかし(横笛は月見にはとても風流です)。いづら、*御達(さあさあ、みんなも)。*琴とりて参れ(箏を持って来て弾きなさい)」　*「琴の琴」は「きんのこと」で七弦

古琴だ。古琴は式典用の合奏楽器ではなく、文化人が個人で情緒に遊ぶ楽器とのことで、その演奏には高い教養と何より本人の興味が必用とされ、基本的には相当に地位ある男でないと自由な境地が得られないので、弾きこなせないもののようにこの物語で、確か若菜巻で光君の口から語られていたように思う。弾ける者は限られるので、此処では妹尼君に対しての呼び掛けなのだろう。　＊「御達」は「くそたち」とローマ字表記がある。誤字かと思ったら、注に＜「くそたち」と読む。「くそ」は二人称の代名詞。古風な語句。＞とあった。其処の人、くらいの言い方だろうか。　＊「琴取りて参れ」は「ことりてまゐれ」だから＜十三弦を持って来て弾きなさい＞だ。

と言ふに(と言っているのを)、*それなめりと(中将は廂の客間で、母尼君が言っているらしいと)、推し量りに聞けど(推量して聞こえたが)、「いかなる所に(どんな部屋で)、かかる人(この老女は)、いかで籠もりゐたらむ(どんな風に籠もり暮らしているのだろう)。*定めなき世ぞ(人の寿命は分からないものだ)」、これにつけてあはれなる(と、早世した故君に引き比べて感慨深く思われます)。　＊「それなめり」は注に＜中将の心中。老母尼君であるらしい、の意。＞とある。廂の客間と尼君の母屋の部屋とは御簾で仕切られているのか、襖戸や衝立や几帳で遮られているのか、しかし建物構造は開放空間で合奏できた、ということらしい。　＊「さだめなきよぞ」は注に＜『集成』は「老少不定のこの世が、これにつけてもしみじみ思われる。自分の妻だった孫娘は早く死に、八十を越えたこの尼君がまだ存命なのに感慨をもよおす。＞とある。

*盤渉調をいとをかしう吹きて(中将は盤渉調の音を吹いて)、「いづら、さらば(では、始めます)」とのたまふ(と仰います)。　＊「盤渉調(ばんしきでう)」は注に＜冬の季節にふさわしい調子。＞とある。が、此処の場面は中秋の名月の頃合いだ。ウィキペディアには＜Bm 律旋:盤渉調（ばんしきちょう）（冬）一磬の曲が多い、唐風＞とあるが、まぁ分からない。

*娘尼君、これもよきほどの好き者にて(娘尼君は、この人も相当な風流人なので)、　＊「むすめあまぎみ」は客観性のある分り易い呼称表現だ。その分り易さが奇妙に見えるほど、この物語では客観表現が少ない。というか、此処でも偶々、母尼君に対する呼称が客観視点での其と一致しただけだ。そも、女房語りに於いて、客観視点という発想も実体も無いのだろう。

「昔聞きはべりしよりも(昔聞きました時よりも)、こよなくおぼえはべるは(あなたの笛が数段優れて聞こえますのは)、山風をのみ聞き馴れはべりにける耳からにや(普段、山風ばかりを聞いている耳の所為でしょうか)」とて(と愛想を言って)、「いでや(となると)、これもひがことになりてはべらむ(さぞ私の演奏は変なものになっていることでしょう)」と言ひながら弾く(と言って弾き出します)。

*今様は(昨今の楽器演奏に於いては)、をさをさなべての人の(大体普通の人は)、今は好まずなりゆくものなれば(古琴は流行らないので)、なかなか珍しくあはれに聞こゆ(娘尼君の演奏は余計貴重で情緒深く聞こえます)。　＊「いまやうは～」は注に＜琴の琴について言う。近年では七弦琴が好まれなくなっている、の意。＞とある。作者は古琴に何分かの思い入れがあるのだろうか。父の為時が古琴に造詣が深かったのかもしれない。

*松風もいとよくもてはやす(松風も古琴の音色によく調和します)。吹きて合はせたる笛の音に(その古琴に吹き合わせた笛の音に)、月もかよひて澄める心地すれば(月も心を通わせるように澄んで光るので)、いよいよめでられて(いよいよ座は興に乗って)、*宵惑ひもせず(老人らしい宵の眠気も催さず)、起き居たり(皆起きていました)。　*「松風もいとよくもてはやす」は注に＜『集成』は「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをより調べそめけむ」（拾遺集雑上、四五一、斎宮女御）を指摘。＞とある。　*「よひまどひ」は注に＜老人の習性。宵から眠くなること。＞とある。

［第八段　母尼君、琴を弾く］

「*女は、昔は、*東琴をこそは、こともなく弾きはべりしかど(女は昔は和琴をいつも弾いていましたが)、今の世には、*変はりにたるにやあらむ(この頃は様子が変わって、男だけが弾くようになったのでしょうか)。この僧都の(息子の僧都から、私の和琴が)、『聞きにくし(聞き苦しい)。念仏より他のあだわざなせそ(念仏以外のつまらないことはするな)』とはしたなめられしかば(と注意されましたので)、何かは、とて(反感して)弾きはべらぬなり(弾かなくなっております)。さるは(でも、私の和琴は)、いとよく鳴る琴もはべり(とても良い音がするんですよ)」　*「をんなは」は注に＜以下「琴もはべり」まで、老母尼の詞。＞とある。訳文では、母尼君が自分の事を「女」と言っている、という解釈らしいが、私はこの「女」を一般名詞として読んで置く。　*「あづまごと」は＜六弦和琴＞。　*「かはりにたるにやあらむ」は注に＜東琴の奏法が。＞とある。が、是は「女は」を受けて、今は＜女は弾かずに男が弾くようになった＞という文意に取って置く。

と言ひ続けて(と母尼君が言い立てて)、いと弾かまほしと思ひたれば(とても弾きたそうにしていると中将は思ったので)、いと忍びやかにうち笑ひて(グッと笑いをこらえて)、

「いとあやしきことをも制しきこえたまひける僧都かな(まことに変な事を制止申しなさった僧都ですね)。極楽といふなる所には(極楽というような所では)、菩薩なども皆かかることをして(菩薩という偉僧も皆こうした音楽を奏でて)、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ(天女が舞い踊るから有難いのでしょう)。行ひ紛れ(それが勤行に障り)、罪得べきことかは(罪になることでしょうか)。今宵聞きはべらばや(今夜はじっくり聞いてみましょう)」

とすかせば(とおだてると)、「いとよし(それではお聞かせ申そう)」と思ひて(と母尼君は気負って)、

「いで、*主殿のくそ(さあ、誰か)、東取りて(和琴を出してください)」　*「主殿」は「とのもり」と読みがある。寝殿、正殿のことで、此処の娘尼君付きの尼女房に呼び掛けた古風な言い方なのだろう。

と言ふにも、しはぶきは絶えず(と言う時にも、咳払いは止まりません)。人びとは、見苦しと思へど(尼女房たちは見苦しく思ったが)、僧都をさへ(母尼は僧都に対してまで)、恨めしげにうれへて言ひ聞かすれば(憎まれ口を利くほどに聞き分けが無いので)、いとほしくて

まかせたり(面倒なので為すが儘に放って置きました)。取り寄せて(大尼は和琴を引き寄せて)、ただ今の笛の音をも訪ねず(今の笛の調子に合わせることもなく)、ただおのが心をやりて(ただ自分の思う儘に)、東の調べを爪さはやかに調ぶ(手慣れた曲を爪弾いて上機嫌で演奏します)。皆異ものは声を止めつるを(他の者は皆、演奏を止めていたので)、「これをのみめでたる(みんな私の演奏に聞き惚れている)」と思ひて(と大尼君は思って)、

「*たけふ、*ちちりちちり、たりたむな」　＊「たけふ」は注に＜老母尼の詞。催馬楽「道口」の歌詞を口ずさむ。＞とある。小学館日本古典文学全集２５などによると、催馬楽「道口(みちのくち)」の歌詞は、「みちのくち(道の口、越前国の)たけふのこふに(武生の国府に、国府の武生に)われはありと(我は在りと、私は住んでいると)おやにまうしたべ(親に申したべ、親に伝えてください)こころあひのかぜや(心合いの風や、私の気持ちを知る北風よ)さきむだちや(先む立ちや、あなたはそっちへ行くんでしょ)」、という風にある。「道の口」は＜京都からある地方に向かう道筋で、京都に最も近い国の呼称。「道の中」「道の後(しり)」に対する。ここは「越の道の口」で越前国(福井県)をさす。＞とある。「武生」は＜福井県武生市。越前国の国府があった。＞とあり、「こふ」は＜「こくふ」の転。＞とある。　＊「ちちりちちりたりたむな」は、大尼君が口三味線のように、と言っても三味線ではなく恐らくは笛だろうが、「道口」の主旋律を口ずさんで、それに調子を合わせて和琴の伴奏を付ける弾き方をしたこと、を示しているのだろう。とにかく、言い換えようがない。

など(などと調子を取って)、*掻き返し(掻き鳴らして)、はやりかに弾きたる(良い気分で弾いている)、言葉ども(その調子の取り方は)、わりなく古めきたり(何とも古臭いのでした)。＊「かきかへす」は＜［動サ四］琴爪(ことづめ)や撥(ばち)の裏で弦をはじいて鳴らす。＞と大辞泉にある。ダウン・ストロークの表拍子にアップ・ストロークの裏拍子を加えて弾く、みたいなことだろうか。だったら＜掻き鳴らす＞だ。

「いとをかしう(とても面白い)、今の世に聞こえぬ*言葉こそは(最近では聞かない弾き方を)、弾きたまひけれ(なさるのですね)」　＊「ことば」は曲か歌詞か節回しか。文脈からすると弾き方のように見える。

と褒むれば(と中将が褒めると)、耳*ほのぼのしく(大尼君は耳が遠くて聞き取れず)、かたはらなる人に問ひ聞きて(側の女房に中将の言葉を聞き直して)、　＊「ほのぼのし」は＜はっきりしない→遠い＞。

「今様の若き人は(ですが、今時の若い人は)、かやうなることをぞ好まれざりける(こういう弾き方を好まないようです)。ここに月ごろものしたまふめる姫君(此処にこの数か月住んでいらっしゃる姫君は)、容貌いとけうらにものしたまふめれど(姿形はとても美しくいらっしゃるようですが)、もはら(一向に)、かやうなるあだわざなどしたまはず(こうした遊び事をなさらず)、埋れてなむ、ものしたまふめる(引き籠もってばかりいらっしゃるようです)」

と、我かしこにうち*あざ笑ひて語るを(と訳が分かっているように明るく笑って話すのを)、尼君などは、かたはらいたしと思す(娘尼君は見聞き苦しいとお思いになります)。　＊

「あざわらふ」は注に＜『集成』は「高笑いして」。『完訳』は「大声で笑う意。嘲笑の意ではない」と注す。＞とある。「あざ」は＜戯れる＞みたいな語感らしい。「戯れる」は＜その場の浮かれ気分で実の無い言動をする＞ような印象のある語だが、公的な立場を離れて、とは即ち組織機能を無視して＜公式な振る舞いとは別に私的に親しく接する＞という作用があって、これも局面打開には有効な処世術だ。尤も、難渋していない普通の、打開する必要の無い日常に於いての「戯れ」は、公的な立場を弁えない秩序を乱すバカ者と見下されるが。

［第九段　翌朝、中将から和歌が贈られる］

これに事皆醒めて(この大尼君の闖入で月見の座がすっかり白けて)、*帰りたまふほども(中将が横川の僧坊にお帰りになってからも)、山おろし吹きて(山おろしが吹く中に)、聞こえ来る笛の音(聞こえて来る中将の笛の音が)、いとをかしう聞こえて(とても風情良く聞こえて)、*起き明かしたる(寝ずに夜明けを迎えた小野尼庵に)、　*「かへりたまふほども」は＜中将が自宅にお帰りになる時も＞かと思ったが、だとすると、以下の文が意味不明だ。「山おろし吹きて聞こえ来る笛の音」ということは、中将が山に登って笛を吹き、その音が山裾の小野尼庵に「聞こえ来る」ということになる。となると、この「帰る」は自宅ではなく、横川の僧都というよりは弟君の禅師に従者を走らせて、用意させた僧坊に寝に帰った、ということになりそうだ。そういう事情を「山おろし吹きて」だけで作者は示した心算なのだろうか。あまりに舌足らずに見えるので、この事情が上手く説明出来るような、何かこの場面に即した引歌でもあるのかもしれない。それらは不明だが、ともかく左様に思う他は無いし、左様に明示補語して置く。　*「起き明かしたる」は下に＜小野尼庵に＞を省いた臨場感ある言い方、と見做して置く。

翌朝(つとめて)、

「昨夜は(よべは)、かたがた心乱れはべりしかば(あれこれ思い乱れまして)、急ぎまかではべりし(いそいで退去致しました)。

忘られぬ昔のことも、笛竹のつらきふしにも、音ぞ泣かれける　(和歌 53-09)

笛竹の　昔も今も　つらきふし　(意訳 53-09)

*注に＜中将の妹尼君への贈歌。「事」「琴」の懸詞。「琴」「笛」「音」の縁語。「竹」「節」「根」の縁語。「昔」は亡き妻を、「つらきふし」は浮舟を比喩。＞とある。「笛竹」の誘いにも「辛い」姿勢で乗って来なかった姫には、確かに問題の「ふし」はありそうだ。が、また、「武生(たけふ)」は「竹生」で＜竹の産地＞だったらしい(日本古典文学全集２５の注解)ので、「笛竹のつらきふし」は笛に合わそうともせずに催馬楽「道の口」を唸った大尼君への皮肉という軽口にもなっているのだろう。

なほ(やはり姫君には)、すこし思し知るばかり教へなさせたまへ(もう少し情けが分かるように仕込んでください)。*忍ばれぬべくは(こんなことを言わずに居られるなら)、好き好きしきまでも(物欲しげにわざわざ立ち寄り申したり)、何かは(どうして致しましょうか)」
*「忍ばれぬ」は＜(恋心を)隠している状態＝(ちょっと気になっても)遣り過ごしている＝言わずに済んでいる＞。「べし」は可能意。

とあるを(と中将からお手紙があるのを)、いとど*わびたるは(娘尼君はいっそう中将に同情されて)、涙とどめがたげなるけしきにて(涙が止められなさそうな様子で)、書きたまふ(御返事を書きなさいます)。　＊「わぶ」は＜寂しく思う。困る。嘆く。＞と古語辞典にあるが、この時の娘尼君は確かに中将と姫の取り持ちに窮していて、これ以上の発展は難しそうだと困っていたのかもしれないが、普通に客観的に見て頑ななのは姫の方だから、此処では中将の手紙に同情したのだろう。

「笛の音に昔のことも偲ばれて、帰りしほども袖ぞ濡れにし　(和歌 53-10)

「袖濡らす 昔の笛の 罪深さ　(意訳 53-10)

*注に＜尼君の返歌。「笛」「音」「昔」「琴」の語句を用いて返す。「泣く」は「濡れ」とずらして返す。＞とある。この歌は、尼君自身の心情だとすると＜あなたの笛の音に故君が居た頃の昔のことが思い出されて、あなたが帰った後でも懐かしさで涙で袖を濡らしました＞という、改めて言うまでも無い分かりきったことを言っているように見える。それに、中将は姫のことを問題にして手紙を遣して来ているので、尼君の心情では実は返事になっていない。また、「袖を濡らす」は＜(故人を)悲しんで泣く＞というよりは＜(男女が)恋しくて泣く＞という閨の表現かとも思う。だから、この歌は＜姫が何か訳有りの過去をあなたの笛の音で思い出して、帰った後も寂しがって泣いていました＞と言ったものと見るべきなのだろう。だとすれば、是は＜事情がある人だから、どうか長い目で見てください＞という嘆願というか言い訳というか、およそ歌らしくない連絡文を和歌の字数に合わせただけのものだ。が、この人は、以前の歌詠みでも情趣よりは大喜利傾向が強く、こういう、ある意味で好い加減な詠み方をする大らかさがあるのだろう。

あやしう(度を越して)、もの思ひ知らぬにや(人情が分からないのではないか)、とまで見はべるありさまは(とまで見えまする姫の現状は)、老い人の問はず語りに(母尼の饒舌で)、聞こし召しけむかし(お分かりになった通りです)」

とあり(と尼君のお返事がありました)。珍しからぬも*見所なき心地して(姫の返事を期待していた中将には、その尼君の手紙は珍しくも無い見応えの無いものに思えて)、*うち置かれけむ(投げ置かれたようです)。　＊「みどころなきここちして」は注に＜主語は中将。浮舟の返事を期待していた。＞とある。ただ、其処まで明示するほどの語調でもないような気がしたが、下の「打ち置かれけむ」の文意を立たせるには、むしろ是を明示した方が効果的かと判断した。　＊「うちおかれけむ」の「けむ」は過去推量の助動詞で、此処では伝聞の言い方に見えるが、実際は事実報告で、尼君に遠慮した曖昧表現というよりは、中将の思惑を読者に想像させるような言い方なのだろう。

*荻の葉に劣らぬほどほどに訪れわたる(それからも、中将からの手紙が喧しいほど頻繁に来ていて)、「いとむつかしうもあるかな(本当に煩わしい)。*人の心はあながちなるものなりけり(男の人は強引に言い寄るものだ)」と見知りにし折々も(と思い知った宮様との思い出も)、やうやう思ひ出づるままに(姫は次第に思い出されるので)、　＊「をぎのはにおとらぬほどほどにおとづれわたる」は注に＜『源注拾遺』は「秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし」(後撰集恋四、八四六、中務)を指摘。『集成』は「以下、浮舟の心」と注す。＞とある。引歌の歌筋は＜秋風が吹く季節になってもあなたは訪ねて来ない、荻の葉はザワザワと音を立てているのに＞くらいだろ

うか。この歌は、「千人万首」サイトの「中務(なかつかさ)」ページに＜次第に心が離れつつあった恋人に宛てた歌＞と解説があって、「荻の葉」についても＜秋風にいち早く反応する葉擦れの音は、秋の到来を告げる風物とされた。＞とある。だから、「荻の葉に劣らぬほどほどに訪れわたる」は＜秋風になびく荻の葉に劣らぬほど、煩いくらい手紙が来ている＞だ。　＊「人の心はあながちなるものなりけり」は注に＜『完訳』は「「あながち」な人であった匂宮との体験を通して、一途な男心に懲りたという気持」と注す。＞とある。

「なほ(どうか)、かかる筋のこと(こういう筋の御話は)、人にも*思ひ放たすべきさまに(相手の方に諦めるように)、疾くなしたまひてよ(早く取り成してください)」　＊「おもひはなつ」は＜思い離れる→諦める＞。

とて(と尼君に訴えて)、経習ひて読みたまふ(経文を習って読んでいらっしゃいます)。心の内にも念じたまへり(本心から経文の教えを信じていらしゃいました)。かくよろづにつけて世の中を思ひ捨つれば(そのように姫は生活全般が世俗を離れているので)、「若き人とてをかしやかなることもことになく(若い人なのに楽しそうにしている時も特に無く)、*結ぼほれたる*本性なめり(出家の意志が固いのは本当らしい)」と*思ふ(と尼君は思います)。容貌の見るかひあり(顔立ちが美しく)、うつくしきに(可愛らしいので)、よろづの咎見許して(他の難点は左て置き)、明け暮れの見物にしたり(尼君は故君の代わりに、この常陸女を日々の慰めにしていました)。すこしうち笑ひたまふ折は(何かの折りに姫が少し笑ったりすると)、珍しくめでたきものに思へり(得難い愛すべき人に思えました)。　＊「むすぼほる」は＜固く結ばれている→強いこだわりがある→秘めた信念がある＞あたりだろうか。訳文には＜陰気な性格＞とあるが、私は＜出家の意志が固い＞と読んで置く。　＊「思ふ」は敬語遣いが無いが、姫に対する尼君の言動については敬語が無い事が多いので、この主語も尼君なのだろう。　＊「ほんじゃう」は＜生まれつきの性質・性格。＞の他に＜本心＞とも大辞泉にあり、私は＜姫は出家に本気だ＞と読んで置く。